

『草雙紙に現れたる江戸の女の性格』

泉鏡花作

明治四十四年四月

草雙紙くさざうしに現あらはれたる江戸時代えどじだいの女をんなの性格せいかくを話はなせとの御注文ごちうもんだが、どうも、咄嗟とつさの事ことで、纏まとつたお話はなもない。

さて草雙紙くさざうしは、純院本じゆんゐんほんなどゝは違ちがつて、作者さくしやは江戸えど戸兒っこが多いおほ。其癖そのくせ、其作そのさくに現あらはれて來くる女性ぢよせいはといふと、上方かみがたで隆盛りうせいを極きはめた院本ゐんほんの中うちにあらはれたる女ぢよ性を模擬もぎしようとして居ゐるから、純江戸兒じゆんえどっこの女をんななるものは餘り出でて來こないのである。大抵たいていは上方かみがたの女をんなを捉とらへて來きて居ゐる。しかしながら、其上方そのかみがたの女をんなには、江戸兒えどっこの氣性きしやうが具そなへさせてある。

で、どうもこの草雙紙くさざうしには世話物せわものが少すくない。大抵たいてい時じ代物だいものである。従したがつて花柳社會くわりうしやくわいなどのことを詳くはしく寫うつした物ものなどは却々なか／＼見付難みつけにくい。

兒雷也豪傑物語じらいやがうけつものがたり、北雪美談時代鑑ほくせつびだんじだいかうみ、白縫物語など

の草雙紙は草雙紙中の錚々たるもので、實に長いが、
其の中へ出て来る女は、やはり前に云つた通り江戸
兒ではない。が江戸兒氣質は十分に吹込んである。

兒雷也の方へ出て来る女主人公で、綱手といふの
がある。これは、腰元であつて、蛞蝓の術を使つた。
固より江戸兒ではない。要するに女豪傑を書いたも
のだ。けれども其性格を調べて見ると、江戸兒的な
ところがある。

私は、恚ういふ性格を有つた女が好きである。平た
くいふと短刀をさし、刀を懐に入れて居る女が好き
である。時代物ではあるけれども、江戸兒の氣象が
十分に流露して居る。

梅曆などの人情物には、町家の娘、炊米女それか
ら花柳社會の女も現れて来る。別に脚色もせず其
儘に書いてある。

此等の女は、江戸兒ではあるが、どうも、江戸兒
の、張とか、意氣地とかゞ持たせてない。例を取る

と、梅曆には、米八、及び、仇吉といふ藝者が出て居る。さうして、それに配するに、女に喰はれてでれ／＼ぐな／＼になるといふやうなぐうたら男が以てしてある。

これであるから、其女が、張とか、意氣地とかを出すことが出来なくなる。無理もない話である。

然る色男に女が惚れる。それに又他の女が惚れる。鞆あてになつて顔を赧くするといったやうなことが落ちになる位。男の方から見たら、まことに結構なことだが、女の方からでは、男のために何いふ力を出すといふことも出来なくなる。

其處へ來ると、草雙紙に出て來る女には、江戸兒は無いにしろ、江戸兒の張や意氣地を遺憾なくあらはさしめて居るからうれしい。

白縫物語で見ると、其の主人公は、大伴若菜姫といふ妙齡の女である。菊池家に亡ぼされた大伴家の息女である。民家に生長し、父の仇を復すがためにどうにかして義兵を擧げようと計謀んで居るのであ

る。

菊池家の方では、當時四天王と呼ばれた鳥山新作、
瀧川小文治、龜谷多門之助、雪岡力松と、それに菊
池家の柱石ともなつて居る鳥山豊後といふ豪傑が居
る。これらが、若菜姫の向うに廻つて居るのだから、
女の意氣地は到處に發露して來るのである。

人情本には風俗が却々詳しく書いてある。藝者な
どを寫すと、長襦袢から、上衣、下着、帯、扱帯、
それから櫛、簪にいたるまで餘程嚴密に調べて書い
てある。好みは現されて居るが、張とか、意氣地と
かいふものは、これを何處にも求むることが出來な
い。張とか意氣地とかは、服装ではあらはされたも
のではないから。

太刀を持つたり、鎧を着たりする草雙紙の女の方
がどれだけ、その張とか意氣地とかゞ出て居ること
か。

若菜姫が白縫大盡となつて、博多の遊廓に遊びに
ゆく處がある。廓に、獨鈷家といふ青樓があつて、

其家の女主人のお牛といふ奴は、以前若菜姫の養母を殺した大悪婆である。若菜姫がそれを知つて、養母の敵と其お牛を討取る處がある。いざ敵といふ折に、姫は其今迄の男姿を女姿にする。

其邊の本文に「一間の中より若菜姫、月の薄雲漏れいで、植木を照らす光とひとしく、かげるふ姿いつしかと、あり／＼と現れつゝ、小棲も取らで庭下駄ひきかけ、女主人のお牛、綾機も、さな驚きぞ、騒ぎそとて、にこりと笑みつゝ寄り来るを、見るに何日もの面ざしながら、輝くばかり夕化粧、肌膚も雪の振袖の白薄物に色映ゆる、から紅の扱帯、柳の腰に刀もおびず、何要心のていさへ見えねど、そなはる威風凜然たる・・・」

武張つた處はあるが、江戸兒の張と、意氣地とは、遺憾なくあらはれて居る。

一方に左様に強い所があると同時に、他の一方に於いては、又優しいところがある。若菜が、蜘蛛の妖術を使ひ、お牛を蜘蛛の巣で木の上に縛り付け、竹槍でこれを殺すところで、今白縫大盡を男と思つ

て惚れて居た綾機が恐がつて縮み返ると、「そんなに可恐れれば、わたしの方に寄りて居や。」と若葉がいふ。

如何にも強い氣象であつたのが、一轉していかにも、優しくなる。こゝが江戸兒の嬉しい處で、私の好きな處である。

それから、草雙紙に出て居る女は、近松物などの翻案が多くつて且つ、それに要せらるゝ地名は態と東京のところを鎌倉あたりへ持つて行つてゐることは忘れてはならぬ。淺草寺を長谷寺の觀音になし、すみだ川を花水橋に使つて居る。

草雙紙ではないけれど仙臺萩にも「宵に降つたる雨あがり、しかも其夜は眞の闇、花水橋の樋の口から、榮螺の殻に火を燈し、又ツと出たなアこゝのお内儀……」とある。其の花水橋が今云つた例である。

又、當時の女の服装と化粧とを調べて見ると、衣服は交けの少い雪の振袖などを用ゐ、化粧は、極く

淡泊な夕化粧などを得意として居た。これで無ければ、江戸の女に調和が取れぬ。

話は鳥渡變るが、當時蒨弱本といふのがあつた。これは京傳、三馬などが、其時分の花柳界の風俗を直寫したものである。

三馬の書いたものに『辰巳婦言』といふがある。これには、すこしも隠さず、其まゝに女の性格を書いて居る。お苦といふ板頭（吉原でのお職といふにあたる。）に、新川屋の番頭と、鳥井町の若旦那と、職人の棟梁との三人が通つた。さうすると、お苦は、若旦那と番頭とは肱を喰はせておいて貧乏人の棟梁に情を立てた。ーとかういふやうなことが書いてある。

江戸兒はどうも旋毛が曲つて居る。これを豪く云つたら、弱きを助けて、強きを挫くといふやうな意氣を發揮する譯なんだが、悪く云つたら變に横意地があるのだとも云はれる。しかし吾々のやうな慄の淋しい者などは、無論これらを大に歓迎すべきだ。

かやうに江戸の女が貧乏人を好くといふのは、さうしなれば先祖に對してすまぬとでも云つたやうな氣がするのかも知れぬ。今の純粹の江戸兒の女にまで及んで居るさうである。

お苦生立の本文を見ると、其の女の意氣地やら境遇やらを明かに見ることが出来る。「お苦が出所をかんがみるに、定めて本所あたりの片端に、お目印、あをがみの（らふそく）と、刷書の水油有りの障子を立てたる九尺店の露地に、本道外科と割りて書いたる醫者の標札、さんげ／＼ぼんてんとともに雨ざらしとなり、藁葺き屋根の棟わりに、蛇の這ひ出るながしもと・・・」

また、本文「いはけなき時は、めけたらたんきり、大ころばしを口にほ／＼ばり、南京小紋に、鳴海絞りのつぎ／＼、油揚の如きを引はり、餛飩屋の汁つぎを以つて、醤油を六文、一文の糠袋、襖みがきの小娘なりしも、十五といへる春の頃、おやぢが中風のために、遂には金にかへられ、そも人となりて、びろうどの半襟、縮緬の二布、錦々たるといへども、

心は生來を失はず。新川の番頭鳥井町のむすこ株を
廃して、かゝる貧困の侠客に實情をつくす。是なる
か、非なるか。」とある。以て知るべし。

金を持つて居る旦那を振つて、金の無い奴に達引
く。かういふことをやれば、如何様お轉婆のやうに
も聞えるが、不思議なことには上流の、乳母、日傘
で育つたお嬢様ともいはるゝ女までが錢の無い方に
味方をするやうなことになつた。所謂これ、是なる
か、非なるかなる次第さ。

理窟といふものは、毛頭念頭にかける事なく、す
べて、算盤玉を度外にして、實の情を立引くといふ
のが江戸の女の本領となつて居る。この意氣地は、
現代の江戸兒にまで傳つて居る。

とに角、この窮理的に考へるのは都會の氣風では
ない。例へて云つて見ると、こゝに、「夜露だと、
直ぐ降る」といふ諺がある。これを江戸兒が聞くと、
左様かと承知して、別に、それが何故に夜露は降る
のかとは窮理せぬ。

其處へ來ると、田舎の人は理窟で行かなければならぬのである。何故降るのかと窮理して見ねば安心が出来ぬのである。學理の上から云つたら結構なこどもであらうが、人情から見たらば、算盤的な、拙いものになつて了ふのである。

彼のお苦とて、何所までも貧乏人が宜いといふ譯ではなからうが、意氣地といふものがあればこそ、かやうな素寒貧な漢を情人に有つても見るのであらう。我儘だといへば其れまでだが、其處にはまたうるはしい江戸兒氣質といふものがあるのである。

江戸兒氣質の前には、必ず利害問題は打消されて了ふのである。

この事に就いて田舎と都會とを比較して見るのに面白い一例がある。何やらの草雙紙の中に在つたかと思ふ。

或村に女があつた。その女は亭主持であつた。それが其土地ののらくら男と密通いた。或る時亭主が、旅をするとして、その女に、村長へ届けるまで、一時

自宅に藏ひこんでおいた村から集めた年貢金を預けて出て行つた。

その事と知つた彼の密夫は、其金を出せと女に迫つた。女は「私はお前といたづらはしてゐるが其金をお前に呈げて、永年連れ添うて來た夫に難儀かけることは、どうしても出來ませぬ。」と云つて、却々承知しない。密夫は立腹で、「出さぬといへば、お前を殺してゞも、己がものにする。」と血相かへる。すると女は、「それぢや殺して。．．．．」と云つて、遂に殺されたといふ話がある。

なるほど、或る點でほ、その田舎妻のいふことは理屈に合つて居る。然しながら、義理といふことに氣が付いて居る位なら、最初から夫の目を竊まぬが宜い。

江戸兒ならば、始めから、其金を曝露だして與れて了ふ。那麼ことを考へなくちやならないやうになる位なら、始めからくつゝかないのだ。これは甚だ悪い例。

で私はこの江戸の女の素質は甚だ好きである。し

かしながら私も亦未だ、それが是なるか、非なるか
を知らない。